

# SHOW-MEシネマーム

## ザ・ウォーカー

2010年・アメリカ映画

配給／角川映画・松竹

118分

2010(平成22)年4月15日鑑賞

試写会・梅田ピカデリー



### Data

監督：アルバート・ヒューズ、アレン・ヒューズ  
脚本：ゲイリー・ウィッタ  
出演：デンゼル・ワシントン／ゲイリー・オールドマン／ミラ・クニス／レイ・スティーヴンソン／ジェニファー・ペールス／フランシス・デ・ラ・トゥア／マイケル・ガンボン

### みどころ

世界滅亡。それはあまり考えたくない設定だが、生き残った男はなぜひたすら西を目指す“ウォーカー”に？他方、彼が毎日読む「ある本」とは？そして、街の支配者が執拗に「ある本」を求めたのはなぜ？

『座頭市』（89年）ぱりのアクションあり！美女の登場あり！ハラハラドキドキの展開あり！そんな中で次第に神々しくなっていくデンゼル・ワシントンに感動！絶対のお薦め作が、ここに登場！

### こんな緊張感大好き！

映画冒頭、カメラが少しずつ移動しながら一体の死体を頭の方から足の方へ写していく。周囲に用心しながらその死体にじり寄ってくるのは、一匹の猫。この死体から一体何を獲得しようとしているのだろうか？そんなことを考えていると、カメラは更に移動。そこには顔に奇妙なマスクをつけ、弓矢を力いっぱい引き、獲物を狙う男の姿がクローズアップされてくる。「あっ、矢が俺の方に射られそう」そう思ってギクッとすると、矢は私の方ではなくあの猫の方に向かって一直線。周囲に注意しながら獲物の猫を手にした男は、一人静かにその現場を去って行った。そんな冒頭のシークエンスは約3分。もちろん、その間何のセリフもなく、聞こえるのは男の息づかいだけ。この冒頭のシークエンスの緊張感はかなりのものだ。

次のシークエンスはサングラスをかけリュックを背負った大男が、人っ子一人いない荒れ果てた街の中を歩き、一軒の家の中に入り、そこでくつろぐシークエンス。あの獲物の猫を焼き、イヤフォンをつけて音楽を聴き、一匹のねずみに気前よく猫の肉を分けてやっ

た後、男は「ある本」を読んで眠りについた。

この大男は一体何モノ？ タイトルどおり、きっとこの男が「ウォーカー（歩く男）」なのだろうが、冒頭のこれらのシークエンスだけで地球上の人間が壊滅的打撃を受けたことがよくわかる。本作は『フロム・ヘル』（01年）で大成功したアルバート・ヒューズ、アレン・ヒューズ兄弟の最新監督作だが、私はこんな緊張感大好き！

## あの設定よりこの設定！あの俳優よりこの俳優！

本作は「ある事情」によって人類が壊滅的打撃を受けた後、一人生き残った男“ウォーカー”ことイーライ（デンゼル・ワシントン）が、ある目的のために西へ西へと歩いていく姿を描いたもの。ところで、私は以前にも人類滅亡後たった一人生き残った男の姿を描いた映画を観たが、あれは何だった？ それは、黒人俳優ウィル・スミスが主演した『アイ・アム・レジェンド』（07年）だ。

『アイ・アム・レジェンド』はウイルスが蔓延する中ニューヨークでたった一人生き残った男の一人芝居だったため、ウィル・スミスの熱演にもかかわらず限界があり、私の採点は星2つだった（『シネマルーム18』369頁参照）。しかし『ザ・ウォーカー』はたった一人生き残った男という設定を早々にあきらめ、中盤からは街のボスであるカーネギー（ゲイリー・オールドマン）やその美しい娘ソラーラ（ミラ・クニス）らを登場させて面白いストーリー展開としている。また、たった一冊の「あの本」という設定が実に興味深い。

したがって私には、『アイ・アム・レジェンド』より『ザ・ウォーカー』の方が断然上！ そしてまた、ウィル・スミスよりデンゼル・ワシントンの方が断然上！

## 前半は座頭市を彷彿？

若き日のクリント・イーストウッドが演じたマカロニ・ウエスタンの名作『荒野の用心棒』（64年）や、若き日の勝新太郎が演じた『座頭市』（89年）などはいずれもアウトローの一匹狼の個性が命。彼らの特徴はめっぽう腕が立つことで、そのガンさばきや仕込み杖さばきはそりやお見事だった。注意深くみると、イーライが背負っているリュックには鋭い短刀が入っていることがわかる。これが料理用のものではないことは誰の目にも明らかだが、剣道の素養などあるはずのない黒人男がこんな短刀をどのように武器として活用するの？

そんな観客の期待に応えるシークエンスは、迫力満点だ。さあ、囚われた女をエサにした強盗団から、「リュックを置いていけ！」と絡まれたイーライが見せる短刀さばきとは？ 『座頭市』の仕込み杖さばきそっくり（？）のイーライの短刀さばきにビックリするとともに、そのカッコよさにホレボレ。時代も舞台も全然違うが、イーライの一匹狼的でアウトロー的な生き方と短刀さばきをみていると、思わず勝新の『座頭市』を彷彿。

## 街の支配者の求心力は？

映画が始まった時はイーライだけが生き残っているのかと思ったが、イーライが強盗団に襲われるシーンやその後バイクに乗った男たちが一組の男女を襲うシーンなどをみると、必ずしもそうではないことがわかる。そんな中イーライがたどり着いたのはカーネギーが支配している大きな街。こんなシーンをみていると、アメリカの伝統的な西部劇映画に登場してくる街と同じようなテイストで、やはり人間はしぶとく生き残るものだと感心。

イーライはこの街ができるだけトラブルを起こさないでバッテリーの切れたラジオ（i POD?）を充電してもらうとともに、生きるのに不可欠な水を買いたいだけだが、どうもこの街はヨソ者には厳しそうだ。ここでみせるイーライのアクションは先ほどみせた強盗団相手のアクション以上に見モノだから、  
その華麗なる短刀さばきに注目！



ザ・ウォーカー

6月19日(土) 梅田ピカデリー、なんばパークシネマ、MOVIX京都  
神戸国際松竹ほか全国ロードショー

配給：角川映画、松竹

©2010 Warner Bros. Ent. All Rights Reserved.

ただ、この街における映画の見せ所はイーライのアクションではなく、カーネギーの求心力がどこにあるのかという点。カーネギーの第1の子分らしいレッドリッジ（レイ・スティーヴンソン）は身体のデカい武闘派だが、カーネギーはただのヤサ男なのに、なぜこの男がこの街の支配者に？ カーネギーが部下たちに命じているのは「一冊の本を探してこい」ということだが、カーネギーが求めている一冊の本とは一体ナニ？ 他方イーライによってカーネギーの部下たちがたくさん斬り殺されてしまったにもかかわらず、カーネギーのイーライに対する対応は紳士的。そして、カーネギーがイーライに要請するのは「俺の右腕になってくれ」ということだが、さてカーネギーはイーライに何を期待しているの？

### こんな誘惑にも負けないとは・・・

本作には水との交換代金としてイーライが支払った、この世で最後かもしれないというシャンプーでカーネギーから髪の毛を洗ってもらう女クローディアが登場する。クローディアを演ずるジェニファー・ビールスは私が大好きだった映画『フラッシュダンス』（83年）の主演女優だが、あれから27年も経ったのだから多少老けるのは当たり前。

他方、カーネギーとクローディアの間に生まれた娘ソラーラは、とび切りの美人。そこで、どうしてもイーライを味方に引き入れたいカーネギーが考えついたのは、中国がよく使っている（？）らしい、いわゆるハニー・トラップ。つまり美人のソラーラをイーライの部屋に差し向け、一夜を共にすることによってイーライをカーネギーの陣営に引き入れ

ようという魂胆だ。自分の娘をそんな「人身御供」に差し出すことにクローディアは反対したが、この街ではカーネギーの権力は絶対らしい。

そんなカーネギーの命を受けてソラーラはイーライの部屋に入り込んだが、さてこんなハニー・トラップに対するイーライの抵抗力は？私なら即アウトだが、イーライはさすがだ。もっとも、このまま帰ったらクローディアがカーネギーからひどい目に遭わされるというソラーラの説明を聞いたため、イーライは一晩ソラーラとの間でいろいろと会話したのだが、それによってその後のトラブルが発生し、かつそれがソラーラの運命をかえることになったのだから人生は面白い。

全く字が読めないソラーラにとっては、父親のカーネギーが必死になって「ある本」を探していることの意義が理解できないのは当然だし、イーライが毎日本を読んでいるということ自体が理解できないこと。しかし、食事の前に手をつないで目をつむり、今日の食事を「ある人」に感謝して最後にアーメンと唱える儀式に彼女がハマったらしいから面白い。しかして、それは一体なぜ？そこらあたりが本作中盤のポイントだが、多くの観客はそこらあたりでイーライが大切に持っている「ある本」とは何かに気づくはずだ。

## 次第にデンゼル・ワシントンは神々しく！

本作は私の採点では星5つで、絶対のお薦め作。その最大の理由は、終盤からラストにかけてイーライ役のデンゼル・ワシントンが次第に神々しく見えてくるからだ。多くの日本人はイエス・キリストを信じて生きている西欧人の心をよく理解できないから、食事の度に祈りを捧げる姿や日曜日ごとに教会に通う生活習慣も理解できないはず。ちなみに、日本でも聖書を置いてあるホテルがあるが、部屋の中でそれを読む人はキリスト教信者だけで、そうでない人は見向きもしないはずだ。そう考えると、イーライが毎日読んでいると述べ、ソラーラが「表紙に十字の印がある、大きな本」とカーネギーに報告した本はきっと・・・？他方、カーネギーが執拗にイーライの持っている「ある本」を手に入れようとしたのは一体なぜ？それは「ある本」に記されている言葉だけが真に人を支配できるとカーネギーが信じていたからだ。

マーサ（フランシス・デ・ラ・トゥーア）とジョージ（マイケル・ガンボン）という面白い老夫婦を登場させた後半のド派手なドンパチは少しマンガチックだが、結構面白い。この攻防戦によって腹を撃たれ、「ある本」をカーネギーに奪われてしまった頃から俄然イーライは神々しくなってくるからそれに注目！イエス・キリストの復活を信じている人はもちろん、それを信じていない人もここらあたりでやっと、なぜイーライが“ウォーカー”としてひたすら西に向かって歩いているのかがわかるはずだ。そして、イーライとソラーラの奇妙な二人三脚でたどり着いた西の街に待ちうけるイーライの運命とは？冒頭とはガラリと雰囲気が変わる中、あなたはきっと大きな感動を味わうことができるはずだ。

2010(平成22)年4月16日記